

熟れる

野口貫

ころり寝転がった私の側で

障子の隙間から漏れる

柔らかな春の陽射し

その穏やかな道の上を

細かなホコリが列をなし並んで

どこまでも無垢で純粹で

入れ替わり 立ち替わり

日を浴びて

膝立ちになってするりと近寄ると

私を迎え入れてくれた

手のひらを器にそのまま食べてしまえそうな

光の束

閉じた瞼をじんわり照らしながら

その温もりはおでこに染み込んで

右脳をゆっくり

とろけさせ

そのまま 私の半分は死んでいき

鼻尖 耳 首筋 肩

というふうに

軟骨から

そうして 私だったものは

日焼けした畳に染み込んで消えた